

花のき村と盗人たち

ぬすびと

にいみなんきち
新美南吉

りやく
(略)

みんながじぶんを信用してはくれなかったのです。ところが、この草鞋をはいた子供は、盗人であるじぶんに牛の仔をあずけてくれました。じぶんをいい人間であると思ってくれたのです。またこの仔牛も、じぶんをちつともいやがらず、おとなしくしております。じぶんが母牛でもあるかのように、そばにすりよっています。子供も仔牛も、じぶんを信用しているのです。こんなことは、盗人のじぶんには、はじめてのことでもあります。人に信用されるというのは、何といううれしいことでありましょう。……

そこで、かしらはいま、美しい心になつていたのであります。子供のころにはそういう心になったことがありませんが、あれから長い間、わるい汚い心でずっといたのです。久しぶりでかしらは美しい心になりました。これはちやうど、垢まみれの汚い着物を、きゆうに晴れ着にきせかえられたように、奇妙なぐあいでありました。

——かしらの眼から涙が流れてとまらないのはそういうわけなのでした。